人生和歌集・二十八

みなせ文芸百号記念歌集

祝・百号

多谷　昇太

水無の斎（ゆ）つ岩群（いはむら）に草生（む）さず常にもがもな秀冊子にて

当「みなせ文芸」も今号で１００号となるそうです。私など新参者でよく分かりませんが１号からだともう２５年になるのでしょうか？現存中の同人誌では結構な老舗になると思います。常田正氏という名誉教授が発行されたのだとか。鬼籍に入られた雄国五郎氏やご病気で筆を断っておられる亀井昭氏などの作品が新参者の私であっても脳裡に浮かびます。他にもこの同人誌には錚々たる執筆者の方々が筆を競われており、若輩（…かな？もう私も既に７３）で僭越なのですが諸氏の形や作品を取り入れた和歌をご披露したく存じます。

※冒頭の歌は十市皇女の侍女であった吹黄刀自（ふきのとじ）の歌の狂歌となります。水無：水無川。

かあさんと呼べば応ふる響きあり天国ツアーへ妻が
り行くも

※みなせ７３号掲載、雄国五郎氏の「天国ツアー」圧巻でした。（↓pinterest より拝借）

役小角その傍若を愛でオトヨ愛づ富士に飛び行き呪
ひつ愛でつ

※みなせ７４号掲載「流人考」で「私は島流しや・島抜け・悪党・時の権力に抵抗するレジスタンスのような話が好きだ」と亀井昭氏はおっしゃり、自分もその反骨魂を自認される。今頃は役小角のごとく富士山に

飛び行き呪詛をされ（反抗心を爆発させ）しかし同時に世のオトヨさんたちを慈しんでもおられるだろう。入院中の氏のご回復と再筆をご祈念申し上げます。（←pinterestより拝借）

意を込めて事の成就を差すなり苦集滅道行くべき人か

※みなせ４８号～５０号に跨ぐ長編小説「国友善兵衛」は成平一平太氏の渾身の一作でしょう。大石内蔵助のごとき深謀遠慮の主、国友善兵衛が国友村を隆興させ且つそこに永遠の安泰をも現出させる迄の顛末となりますが、それで終らず天下国家・天下統一を語り、それを為さんがための、傑出した人物たちとの関わりが主題として描かれています。この作品に限らず氏の作品は概ね〝何としても創意工夫をして事を、目的を成就させる〟という前向きさがあり、そこに氏の形とお人柄が偲ばれて好感する次第です。この先、苦集滅道の域まで行くでしょうか…？あと、蛇足ですが作品中で事象（自然描写等）を形容する文のスキルが実に見事です。みなせ中。白眉の一作です。

（←pinterestより拝借）

雑事記とオブジェクションは文句なく面白ければ誰か異議を云ふ
異議あり！と誰か云はざるこの世をば縷々と見給へ背信の世を

※岡森利幸氏のこの２作「オブジェクション」と「雑事記」は１５年以上続いていると思います。「雑事記」は実際に足を伴った現地レポートであり、現地の雰囲気と氏の労苦がひしひしと伝わって来毎回新鮮です。「オブジェクション」は私がやりたいくらいですが氏の見識に遙か及びませんので氏にお任せします。

（↓pinterest より拝借）

遠近（をちこち）に名湯秘湯を訪ねては悠々過ぐす華麗の人か

３０号来の「名湯・秘湯で湯浴みする」シリーズは元校長・岩佐晴夫氏の定番です。とてもファンが多いようです。

（↓pinterest より拝借）

理系男（リケダン）の越境するがに文すればインディアンレッドただに怪しも

※怪し：不思議だ。神秘的だ。もの珍しい。

正直「インディアンレッドの地の壁画」のごとき私にとっては難解でミステリアスな伊藤眞作氏の諸作品です。

数式などチンプンカンプンですが「１７の秘密」など面白かったなあ。ちなみに生成系人工知能・ＡＩの最新系たるChatGPT-４の設定や対応を決めるパラメータの数が１７０兆なんだそうですね。これも関係ありか？あと氏はガチガチの共産主義者です。理系の人が時に文系でも才能を示すことをある女流歌人を通じて知っています。短歌誌・ナイルの「篠てる乃」という方です。ここでは余計ですが左にその一首を…

「がぎがぐつと人工関節たてなほし見事もすそをさばいて見せる」身の不具をユーモアにしかし意地と、ある種（年配ながら）色気さえ醸しているでしょ？音韻と副詞の遊びもそれこそ「見事」です。在日二世（要するに［才ある］日本人女性！）の方です。

沖縄ゆ文以て絵以て言問ひけむインタにフェイスに獅子奮迅中

※インタ：インスタグラム、フェイス：フェイスブック。絵：ここでは写真。

伊藤昭一氏の作品では７８号の「知られざるミステリー作家の死」や８３号の「伊藤整「氾濫」を通過点としたポストモダン文学の考察」などが面白かったなあ。氏は写真家でもあります。

筆断つは遺憾の限り詩人なら同じ血なるをもはやさね来む

寄稿しなくなった方ですが若葉幹人氏の詩、いいものがあります。５２号の「二編の詩」など。私も自称詩人、出来れば合評会などでお会いしたかったなあ。

いかならむ伊豆の下田に咲きし花氷花花房（ひょうかかぼう）となるは惜（あたら）しかるを

下田明美氏は優れた女流歌人です。亀井昭氏と同時期入会の方です。情景歌にとてもいいものがある。情景に自らを写し自らを詠み得る方です。論より証拠、左三首を…

「いずこにて藻塩（もしお）焼くらん元寇の碑のみが残る壱岐の浜辺」

「透きとおる花びら重ね蝋梅（ろうばい）は氷花のごとく蒼穹（そうきゅう）にあり」

「ほろ酔いの色香にも似て海棠（かいどう）は花房となり俯きて咲きぬ」

寂聴と高橋たか子の香（かう）ぞするジプシーの血をいとせめて書に

根来澪子氏はエッセイスト。５０号「エッセイ二題」以来秀作を連発しています。かの算命占星学における「放浪の星」たる龍高星（乱世に力を発揮する戦国武将型でもあるそうな）を持つお方かと拝察しています（因みに私も龍高星）。谷村新司の「昴」を、あるいは高橋たか子を地で行きたかったのではないですか？自分にはジプシーの血がある…と認めておられました。

（↓from pixabay・Free funart さんの作品）

俳人は異なる蕉風醸すなり女丈夫は酒にてなむそろ

※蕉風：俳句の作風。しかしここでは〝侘び寂び〟ではなく、南洋に生える芭蕉、その柔かながらも生え蔓延る強かさを云う。またもちろん、手招く芭蕉風のやさしさをも含む。

みずき啓氏は俳人、エッセイスト。酒豪の方です。４９号紀行文にある「（フィリッピンの）あの、いんちきさ、いいかげんさ、ずるさ、おおらかさ、あたたかさ、あつさが好きなのである。キリスト教だってフィリピンではいいかげんで、ずるくて篤いのである」と４８号の一句「生き上手生かされ上手燗あつし」に氏の真骨頂を見る。後年の「黄昏からの眺め」には幾星霜があるが「あの、いんちきさ…ずるさ」はともかく〝フィリッピンの強かさとやさしさ〟は永遠ならむ。

仁と倫失せば真闇と父慕ふ机（き）には置くなりくれないのペン

源桃子氏は小説家、随筆家、歌人ですが基本的には小説家でしょう。絵もお描きになられますし、歌がお上手です。７５号「倫子の町」が題名ともに印象的だった（名は体を…の類のこと）。あと合評会にはお新香等手料理を持参してくださるので楽しみだった。（レタリング風の絵と云うのか、この類の絵がお得意です。←pinterest より拝借）

大らかにしかし辛らつに的を突く話じゃれにすれば「文句ないでしょ？」

岐久ようこ氏は７０号来でしょうか？だったら私とほぼ同じだが…。この方の「話じゃれ」はとにかく面白い。皮肉とウイットが効いていてネタも尽きないようです（一葉の和歌「…ひとりは漏れぬ野辺にぞありける」同様日々新聞・ＳＮＳには目を通していらっしゃるのでしょう）。俳句と自筆のイラストも添えられ、こちらも超グーです。どうぞ目をお通しを。

あとがき：順番が男女順になったのは偶々で他意はありません。あと筆に出来なかった方もおられるのですがこちらも同様です（掲載料とかあるので悪しからず）。最後に蛇足ですが多谷昇太氏でも…。

何すとか格差の下ゆ罷り越し言挙げするとも遂げざらましを　　（大伴家持の狂歌風）

多谷昇太氏…この方は問題ですかね？作品の内容が辛辣だし下品だし、会員の××氏や××氏からは不適当と書や口で評されましたが、しかし何とか粘っているようです。読者に置かれましてもこちらもどうか悪しからず、お許しを…。